

# 猫蓑通信

第 94 号  
平成 26 年  
(2014 年)  
1 月 15 日発行  
(年 4 回発行)



## あえて初心に帰って

青木秀樹

猫蓑会は三十年を過ぎ、会の創設時代の会員の中で何人の方が他界され、一方本格的に連句をしたという方々が入会されている。明雅先生の警咳に触れたことのない方が地方の会員を含めて三分の一に達している。

ご自身で書いておられるように、明雅先生は連句の復興に死に物狂いで取り組んでこられた。先生に連句のおもしろさを伝えた根津芦丈師の教えに加え、芭蕉の連句作法を去来や土芳等の残した聞き書き、原田曲齋が蕉門の俳諧作品を統計的に分析した結果、さらには連歌時代の式目書を繙き、先生は伝統に基づき「現代の連句」のあり方を模索してこられた。

このような試行を重ねた結果、整理されたのが先生の教えであり、「猫蓑会の式目」である。そのように多年にわたって模索を続けられたという経緯により、先生から三十年前に教えられたことと、最晩年に教えられたことには微妙な変化がある。しかし、先生の教えの中で終始変わらなかったことは「付け」と「転じ」の重要性であった。

あえて初心に帰って整理すると、連句の基本をなすものは長句（五七五）短句（七七）を交互に付け合うことである。その基本単位の句は、一句が独立して何を言いたいのか分かることが絶対条件である。また、句の形として発句と第三以外は句の中に切れがないこと（二句一章体にならないこと）が求められる。

「付け」が初心者にとつて最も難しい点である。連句入門書を読んでも、事例は紹介されているものの、どう考えたらうまく付け句が作れるか分かりにくい。

「付け」（前句に対してどのような姿勢・態度で付けるか）、「付所」（前句のどこに目をつけるか、其人・其場・時節等）、「付味」（前句と付け句によって創り出される余情世界の味わい）と言われても付け句の発想が生まれにくい。支考の整理した「七名八体」の考えは付け考案の手法をうまく整理されたものである。しかし実際の連句の座で「七名八体」を網羅的に活用しようとして頭が混乱したという俳諧研究者もいるように、前句を読んでもどこに焦点を当ててかを絞り込む必要がある。

明雅先生の編集された『連句辞典』の「転じ」の項には「二句の転じとか、三句の転じ、など

## ●目次●

第十回明雅忌興行作品 脇起源心九巻	2
平成二十五〜二十六年度正式俳諧配役	5
平成二十五年俳諧芭蕉忌正式俳諧 脇起二十韻	6
甘汁苦汁 芭蕉の心法その三——根津芦丈	6
いなみ全国連句大会浪花賞受賞作品	
歌仙「寒椿」 石川 葵 捌	8
歌仙「寒稽古」 奥野美友紀 捌	9
ある日のころも連句会——石川 葵	8
連句寒稽古 附・井波のこと——奥野美友紀	9
選ぶ人と選ばれる人——鈴木了斎	10
国民文化祭山梨県教育委員会教育長賞受賞作品	
半歌仙「咲くやうに」 鈴木了斎 捌	10
温故知新11…至り候ひにけりな	11
事務局たより	12

と用いられ」と記されている。二句の転じとは前句に対して付け句がどの程度離れて句の世界を発展的に変化させているかのことで、「付け」に変化を求めることである。肝心なことは前句の説明や原因・結果を言わないことである。通常私たちが言っている「転じ」とは三句の転じであって、前句を挟んで付け句が打越句からどのように変化しているかのことである。打越句に戻ることは障りとして嫌われる。芭蕉の時代とくらべて生活の範囲が広がっている現在、豊富な句材を駆使した変化のある作品が創作される可能性が高まっている。前句と付け句との間に生まれる余情を大事にして、初心に帰って、現代らしい連句作品を生み出すことに努めたい。

1・秋灯の座

脇起源心「虫鳴くや」 東 郁子 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪 明雅仏

見晴す方に今宵名月 郁子

零余子飯ほかほか湯気立てて 了斎

読まぬ新聞積まれたるまま 雅子

ウ 空つ風温泉宿で不意に遭ひ 昭

秘めし想ひを隠す角巻 雅

先輩の第二ボタンが既にない 斎

学成らぬまま通ふパチンコ 同

消費税何を言っても上るらし 雅

納戸の隅に丸い卓袱台 昭

夕日には明日の希望があつたのに 同

伊豆の浜から望む富士山 斎

花盛り弁天さまも微笑んで 雅

お玉杓子を見る子どもら 昭

ナオ うららかに四回転のひねり決め 雅

正義のために空を飛ぶ夢 斎

北朝鮮ついで手のとどくとこなのに 雅

凍れる河に今朝も足跡 斎

独酌の酒はじわじわ利いてくる 雅

義理の母との道ならぬ恋 同

女とは何かを日々に教へられ 斎

業平塚に香の絶えざる 昭

ベランダの月に憩へるホタル族 同

ポケモンシルネットにも貼り 斎

ナウ 故郷の緑の駅舎まなうらに 雅

四百四病を知らず罌鏡 昭

一升瓶囲みとことん花の下 斎

ふはり飛び立つ蒲公英の絮 昭

連衆 鈴木了斎 武井雅子 松原昭

2・虫壳の座

脇起源心「色も香も」 青木秀樹 捌

色も香も紫式部か小式部か 明雅仏

マドモアゼルの物思ふ秋 秀樹

後の月メトロ路線図照らしみて 明子

虎猫ひよいと目玉光らす 未悠

ウ 炬燵ではお使いの役じゃんけん 秀夫

裏の床屋は煤迷で混み 明

ジャズバーのボーカルがいま古女房 未

開港記念日祝ふ函館 樹

豊満な胸の歯医者に脈とられ 明

こっそり買った指輪渡せず 夫

お百度の石段登り筋トレに 未

根性ドラマ見ないこの頃 明

花爛漫警策の音響く寺 未

行く春惜しむ爺婆と孫 樹

ナオ 貝柱とられ赤貝しどけなく 明

仮面つけたる宴で見初める 夫

江戸棲をいつか脱がされ逆らはす 未

夢の中では宇宙への旅 明

不可解が不可解を呼ぶ物理学 樹

アインシュタイン長き舌なり 明

曲調に流浪の民の悲しさが 樹

度胸だめしで奇声出す役 未

写真撮るスカイツリーと夏の月 夫

バス停だけに残る橋の名 明

ナウ われ先に病氣自慢の長寿たち 夫

貸した十円決して忘れず 明

湯の町の飛花の舞ひこむ射的場 樹

放物線を描く姫蛇 未

連衆 野口明子 棚町未悠 田中秀夫

3・新絹の座

脇起源心「竹の春」 式田恭子 捌

風狂の旅始まるや竹の春 明雅仏

どこから出るか月を待つ山 恭子

走り蕎麦打粉の手つき鮮やかに ひろみ

部屋の掃除をまづは教はる 有子

ウ 街はづれビルの二階の探偵社 恭

カンカンカンと消防車行く 有

触れてみて私こんな熱いのよ 有

搦めてみれば夢のはかなさ 曜子

やうやくに泳ぎだしたる軽凧の子等 有

サマーコート裾をふんづけ 恭

乳母にはこんなことまで注意され 曜

抱き人形はすでにぼろぼろ 有

従軍の歩を休めたる花の坂 恭

洋館の窓開けてつちふる 有

ナオ揚雲雀一直線は何ゆゑに

誘導燈を頼る飛行士

離れ島持つて行くならカミュの本

耳に残るは教会の鐘

手作りの木製椅子の並びぬて

校長先生出迎へる人

嬰を抱くどこか切ない黒い髪

二つ影凍てやがて重なる

悴んだ心を溶かすキスと月

赤信号の長い点滅

ナウ仕事終へ安い酒でも上機嫌

何も無いのころぶこの頃

大仏は花を愛でつつ鎮座して

色つやもよし眼張煮あがる

連衆 江津ひろみ 佐々木有子 前田曜子

有

曜

恭

曜

有

恭

有

曜

有

恭

曜

有

4・秋耕の座

脇起源心「黄金の留め金」 高橋豊美 捌

爽やかや黄金の留め金旅靴

新酒のすすむ川魚の膳

月の窓笥の調べを整へて

髭の跳ねたる具合よろしき

アルマーニ革のジャケット奮発し

航海王子とひとは言ふなり

地球儀を圍でくると回す姫

滾つ思ひを嘘に包んで

パイ窯の熱が強すぎかりかりに

明雅仏

豊美

香織

鐵男

泉美

男

同

織

男

炭素水素の化学反応

毛の生えた翼竜赤き空を飛ぶ

ダンボの遊具何度でも乗る

初花は父が植ゑにし樹に開く

目借時には孫もお祖父も

ナオお蚕のむにゆと伸びたり縮んだり

電卓の要る消費税率

六十五介護保険の請求書

寒九の水が腸に沁む

切々と黒人霊歌歌ふ女

見えるところにキスマーク付け

漢方の精力剤を煎じぬて

婦化植物の繁茂する土手

評判の歌舞伎の「鮮屋」はねて月

平塚らいてうけふも夜濯

迷子郵便供養する寺

参列の回向柱に花吹雪

のらりくらりとうねる連風

連衆 平林香織 林鐵男 金子泉美

織

豊

織

男

豊

織

男

泉

豊

織

同

泉

男

泉

織

豊

泉

5・新走の座

脇起源心「残菊や」 松島アンス 捌

残菊や翁ゆかりの湯の匂ひ

単線電車軋り来る月

虫しぐれ竹む廊に鳴き出して

硝子の柵にしまふ人形

硝子の柵にしまふ人形

明雅仏

アンス

清

孝子

男

同

織

男

ウ 蜜豆の豆大好きな父であり

文の遣ひに走る書記官

式場の予約もすべてメールにて

隠れ肥満を包む毛衣

白猫が薄目開けてる高層階

なむなむなむと拝むお地蔵

恰好付け貸した金子は戻り来ず

ななつ星号贅を尽くせる

対岸の喧騒遠く花見舟

琴弾鳥を真似てひと節

ナオ からくりの夜叉ともならん春祭

派遣社員の誓ふりベンジ

カンツォーネ寄り添って聴くアマルフィ

滴る水着岩陰で脱ぎ

虫干しの本に紛れてゐる艶書

さはさりながら妻が一番

心地よく酔ひたり越の純米酒

脊梁山脈雪化粧して

丹精の里の柵田に冬の月

卒寿の匠ろくろ確かに

ナウ 自慢なり上下ずらりと己れの歯

しばしを草に座り目瞑る

花の塵吹き揚げられし旋風

厨に届く浅蜷蛤

連衆 宇田川清 坂本孝子 内田遊民

遊民

孝

清

孝

ア

民

清

孝

清

民

同

同

ア

同

清

孝

同

民

清

孝

ア

民

清

ア

民

平成二十五年十月十六日  
於 江東区芭蕉記念館

6・新藁の座

脇起源心「秋の声」 副島久美子 捌

紙剪れば紙にも秋の声生まる 明雅仏

転がりもせず卓の団栗 久美子

月の出をもへじの案山子眺めぬて

スピードゆるめ車走らす 敦子

ウ スキーヤーとりどりの服ゲレンデに 照子

炬燵の中で足を触れ合ふ 要子

流し目にふらりと揺れる純情派 健

やけのやんばちご飯三ばい 照

オバマさんアメリカ財政どうかして

御隠居出てきて話もつれる 敦

CMにすぐにつられる性質なので

ミニスカートが闊歩する街 要

おはします南洲さまに花爛漫

永き日過す永字八法 照

ナオ あちこちの訛とびかふ遍路宿

ちびりとやって果ては大トラ 要

記者会見脳天見せて謝って

築三十年隙間風吹く 健

ふんはりと何やら影の映る窓

寂しい背に惚れてしまひぬ 敦

ぞっこんでいつも口付け倍返し

リズムよろしきハモニカを聞く 照

世界遺産月も讀へる夏の富士

甚平を着た遠き日の父 同

ナウ 丁寧な経歴書には少し嘘

動詞活用棒暗記して

花の奥人の気配のさんざめき

小川に注ぐ暖かな雨

連衆 由井健 武井敦子 田所照子

山本要子

7・葦火の座

脇起源心「ヴィノロッソ」 下鉢清子 捌

ヴィノロッソ<sup>※1</sup>琅玕洞の望の月 明雅仏

カンツォーネ聴く秋燕の島 清子

晩稲刈り等もしっかり刈り上げて

軽い会釈ですれ違ふ人 吉文

ウ 煤逃げと言ひつつ集ふ囲碁仲間 泉子

愛あみむめも手製マフラー 堅三

焦がれたる思ひをつづるツイッター

遠音の胡弓余韻爛嬾 泉

源氏絵の二阨円札見当たらず 美奈子

開運印鑑買はされし悔 同

ギヤラリーの拍手喝采ホールインワン

義理の鴉がかかーかと鳴く 同

花の舞ふ無人の駅に途中下車

おもてなしとして苞の草餅 泉

ナオ 猿山にボスの交替のどらかに

どうなることか拉致の問題 同

口上は隅から隅までずらずいと

嫁に来いよと熱燗の酔 吉

意思表示炬燵の中で抓られて 奈

青い痣には軟膏を塗る

アルバムにセピア色した老の顔

礼拝堂にパイプオルガン

月浴びて衣桁に掛ける薄ごろも

ナウ 折紙は外つ国びとに喜ばれ

ヒツグス粒子風光る宙<sup>そら</sup>

哲学の道より現れて花の尉

蜜蜂を飼ふ少年の夢

連衆 永田吉文 青木泉子 小暮堅三

鈴木美奈子

8・初獵の座

脇起源心「虚実皮膜」 遠藤央子 捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな 明雅仏

月をうつしてしばし語らふ 央子

葉鶏頭色美しく庭園に 文子

イーゼル立てるひげ面の画家 醉山

ウ 荒るる海鬼跳ぶてふ佐渡便り 霞

冬眠の夢あはくはかなく 久美子

よき妻はよく食べくよく寝よくしゃべる

わわしい女となるは半年 山

着信の履歴すつかり削除して

心の内を隠す日韓 文

キッチンもトイレどこにも在す神

行きたいところ白地図に描く 山

船頭の唄にも酔はむ花見舟 文

二重に三重に春の匂ひす 久

ナオ 抱卵期観察日記続きをり

タップリヨーチン脛の擦傷

映画スターミステリアスな過去で売る

鏡のむかう何も見えない

湯に浸る温泉の精雪の宿

この指だけが君を忘れぬ

罪深く青き情炎ほしいまま

四回転の着地決めたり

夕顔へ童話のやうな円き月

斑猫に蹴きゆるゆると行く

ナウ 自転車に古書を満載坂の道

白き雲浮くまっ青な空

振り向かず最期の花を見て去りぬ

紙ふうせんをボンとひとつき

連衆 橘 文子 吉田 酔山 高塚 霞

斉藤 久美子

文 山 文 霞 文 同 山 久 同 山 霞 央 霞

9・菊枕の座  
脇起源心「秋の声」

生田 日常義 捌

紙剪れば紙にも秋の声生まる

鉄に映る漸寒の月

嬰兒の喃語ご機嫌さはやかに

つもり貯金の貯まる楽しみ

休暇には永住の地を探す旅

ふつつふつと滾る浴岩

撫で肩をすべらせ落す冬羽織  
ホットワインで酔ったふりする

明雅 仏

常義

淳子

富子

瞳

鄭和

富 和

黒猫にクロと名付ける芸の無さ

医療制度の整はぬ国

駅前のお餅倒産噂立ち

追試追試でやつと進級

五十四万石の城花の雲

おどけた線で宙を舞ふ虻

ナオ 春眠の飽かぬままなる独居にて

みんな揃って食べる弁当

山の湯の挨拶訛る老女将

いつも遅れる路線バス待つ

ケータイに絵文字ばかりで来るメール

初庚申の日は空けておく

目には目を紅をぬめりと載せる唇

タイ締める間も惜しい後朝

滝壺に砕け散る月浮かびをり

ナウ 延命は親掛かりでも手を尽くす

気象予報士慎重な夏

アンパンマンよ永遠に翔べ

花の暮転任近しと盃重ね

連衆 上月 淳子 名古屋 富子 北爪 瞳

影長くして草を摘む人

高山 鄭和

淳 和 瞳 淳 同 瞳 富 淳 義 瞳 富 和 富 和 同 富 和 富 富

平成二十五〜二十六年  
度 猫蓑会正式俳諧配役

宗 匠	坂本 孝子
脇宗匠	橘 文子
執筆	武井 雅子
知 司	鈴木 了齋
副知司	松島アンス
座 配	同
花 司	林 鐵男
香 元	式田 恭子
配 硯	佐々木有子
同	野口 明子
老 長	本屋 良子



平成二十五年十月十六日、俳諧芭蕉忌での正式俳諧  
今年四月、亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧でも同じ配役で興行予定

甘汁苦汁(第十一回・芭蕉の心法その三)

根津芦丈

昭和四十(一九六五)年十一月二十日刊

「山樸」第十二号より転載

樋口功は、連句は個性の詩的融解芸術渾化也、個性の強烈なる者ほど連句には不適不才なり。と云つて居る実に至言である。曲斎は学問があつて、弁説が甚だ強烈にして人の説などに耳をかさず、蕉風にも心法にも徹する処がなく、ただ鼻柱が強く誰もさけて、相手になる者がない。であるから学問のあるに任せて、一生かけて作つたのが婆心録と海印録の二著である。此の婆心録中もつともあしきは処。

都て付句は付る時は正面に作り、見立る時は言  
い曲る者也。

と云い、其の二は、

冬枯れ分けてひとり唐萱

野水

前句笠脱ぎてと云ふを笠も着ず時雨に濡れつつ、  
踏み居る言葉と見立て其人の用を付けたり、冬  
枯分けて独り唐萱とは、只一人冬枯の野畑尋ね  
て萱つむ人を見て茶人と云ふ者は強い物好也、  
有りもせぬ萱を尋ねて雨も厭はずと噂する様也。

丈曰。あたり一面枯々の中に唐萱だけが青々  
として居る「叙景」の句である。この句の中に

は笠も冠らず、濡れて居る人なぞ全然居らぬ、  
前句の人を持ち込んでゴチャにして居る。おま  
けに有りもせぬ萱を尋ねてたの、茶人と云ふ者  
はなど、此位馬鹿げた話は、此婆心録中にても  
此二つが尤も甚しきものである。

心法(芭蕉が晩山に送つたもの)

二白 俳諧御執心の由先づは珍重、ものしりに  
ならんよりは心の俳諧肝要に御座候。句者は沢  
山御座候へども心法を守る人はまれまれの  
のにて候。

季寄の御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候  
まま考へ跡より申入候。

増山の井御用可然候。 十七日 はせを

晩山様

芭蕉は、心法と云ふ宝刀を持って居つて、制約  
の書は作らなんだ。自由であるべき俳諧を束縛  
するからと云つて居る。然し野放しでない、数  
限りもなくある制約の書の中に、大方の人々  
のまもり来れる処を少しくとりあげて見る。

連句では尤も大切なのは三句めの転じである  
から、三句続けてよいもの一つもない。

生類、植物、山類、水辺、居処、神祇、釈教  
天象、其の他、自他に就ては、北枝の八方自他  
伝にある通り自も他も三句続けてよいものはな  
い。以上のものは三句去りである。然し木と草  
と変り、毛ものと魚と変るように同じ植物でも  
生類でも、種類が違へば二句去りにしてもよい。

平成二十五年俳諧芭蕉忌 正式俳諧

俳諧連歌

脇起二十韻「寒菊や」

寒菊や粉糠のかかる白の端

翁

囲炉裏を開く移築古民家

秀樹

デザイン創作意欲湧くならん

文字

耳にやさしきCDの曲

郁子

皎々と真如の月の渡る湖

清子

灯籠流す女気になり

庸子

恋心誘ふ萌黄の秋扇

利子

猫が巧みに回すドアノブ

アンズ

PPPコメの行方にはらはらし

路子

産土神を拝む若者

良子

ナオ蘇る城の白鷺大空へ

遊民

昼月仰ぐ青秋の路地

常義

芋焼酎薩摩おごじよの提げてくる

鐵男

甘い言葉は美しき嘘

恭子

抱く嬰はぬいあなたに生き写し

了斎

自叙伝今やベストセラーか

明子

ナウあの頃はまだ見ぬ国に夢を馳せ

有子

逃水を追ふ蒸気機関車

酔山

花霞山の裾まで畝を立て

孝子

春の炬燵に友よりの文

執筆

平成二十五年十月十六日 首尾

江東区芭蕉記念館に於いて興行

打越しでよいものはない。

右の外に五句去りのものがある。覚えよいように哥にしている。

衣季や竹田の舟路夢涙月松枕煙り五句去り

これを砕いて云えば、衣、衣類と衣類、季、同季節春と春、夏と夏と云う様に、竹、竹の類残らず、田、畑等も、舟、筏なども、路、橋渡舟車なども、夢、寝語、軒なども、涙、泣く漢など、月、夏冬等季が違つても、松、門松でも松明でも、枕、寝具の類、煙、火体残らず句柄によれば炭灰等も、猶聳物即霞霧等も、五句去りである。

この外に面去りのものもある。死、葬、地獄の沙汰等は面去りである。

極く簡単に書き上げて、このようにある。猶この外に人情（叙情）の句は一句で捨てず二句以上続ける、人情なし（叙事叙景）の句は二句以上続けるな。

これは、観音開きになつたり、同じ処に居て進展せぬことが出来るのをおそれるからである。哥仙なら三十六句三十六歩後へ戻る心なしである、つまり制約はそのため必要である。が、芭蕉の心法では、この制約を超越する場合がたまたまある、前号にもあげておいたが、

草むらに蛙こはがる夕間ぐれ 植物 凡兆  
路の芽とりに行燈ゆり消す 全 芭蕉  
道心のおこりは花のつぼむ時 全 樽 去来

能登の七尾の冬は住みうき 述懐 凡兆

こう付けると、花は樽【心に思い合わせた姿や伝聞】になりて植物三句にはならぬ。

道くだり拾い集めてかかしかな 人情 桃隣  
どんどと水の落つる秋風 人情無 野坡  
入る月に夜はほんのりと明け初めて 全 利牛  
塀の外まで桐の広がる 全 隣  
銅壺より生ぬる汲んで使ふなり 人情 坡  
つよう降つたる雨のつい止む 人情無 牛

起句を別として人情の句は一句だが扉【観音開き】にもならず見事に變化し進展して居る。

昔ながら花に並ぶる手水鉢 自 芭蕉  
ひとり直りし今朝の腹立 全 去来  
いちどきに二日の物も食うておき 全 凡兆  
雪けに寒き嶋の北風 全 史邦  
火ともしに暮れば登る峰の寺 全 来

三句続けるなど云ふ事は、変化せぬからと云ふ事にて、この様に變化し進展して居ればよいのである。芭蕉の云ふ処の心法は、このような処を云うのである。

解題●「甘汁苦汁」は、隔月刊俳誌「山襖」創刊以来第十二号まで、第六号を除き連載され、第十号から三回にわたって芭蕉の「心法」を取り上げたあと、第十九号まで一年以上休載している。

「心法」を取り上げた前二回は、主として江戸時代後期の俳人である小沢何丸（毛呂何丸または茂呂何丸とも）、原田曲齋の二人の芭蕉俳諧解釈に対する批判という形で書かれている。この二人の芭蕉俳諧解釈そのものが、若丈師の言葉を借りれば「愚解を長々と書いて、正しい註解は一つもない」（何丸）「洵に驚き入つた馬鹿者」（曲齋）という体のものなので、その入り組んだ間違いを批判し、解きほぐす記述も入り組んだものにならざるをえない。

ここに転載した第三回も、それに続く形ではじまっているが、この回の途中から、芭蕉の心法そのものを正面から取り上げて論じる形になっている。そのため、この回の内容が三回のなかで最もわかりやすい。順序が逆になるが、この回を先に紹介し、前二回については次の機会に譲りたい。

「哥仙なら三十六句三十六歩後へ戻る心なしである。つまり制約はそのため必要である」と書かれている通り、去嫌いその他の式目も、また北枝の八方自他伝による自他場の法も、連句の運びが停滞したり逆戻りしたりしないためにある。しかしそれらは、前に進むための手掛かりにすぎず、それを守りさえすれば前に進むことが自動的に保証されるというものでは決してない。表面上去嫌に合致し、自他場の人情が打越句と異なつていても、個々の句の内容次第で、実質は観音開きや三句がらみになつてしまふ付けの例は、現代連句作品にも多々ある。逆に、一見それらの制約に反しているようでも、個々の句の内容次第では、ちゃんと転じつつ前に進んで行くこともできる。制約は利用するもので、そこに依存してはいけない。依存すれば逆にその制約を形骸化する結果になつてしまふ。付け運びの技法は、個々の句の内容を真摯に把握し、運びを吟味することの代替にはならないと肝に銘じる必要がある。

転載にあたって、句読点、送りなどに一部手を加え、一部にルビを付し、また【】内の注を加えた。

歌仙「寒椿」 石川 葵 捌

寒椿落ちてくれなぬこぼれけり 葵 良重  
 ふくら雀の遊ぶ山里 良重  
 指を折り十七文字をひねりぬて 敏女  
 遠路はるばる友のおとなふ 八穂  
 円なる月皓々と渡るらん 紅花  
 犬のリードを長くして秋 葵  
 早生蜜柑思ひのほかの酸つばさで 重  
 螺鈿の帯に祖母の追憶 花  
 水浅き川に架かるは恋の橋 葵  
 たったひとつの嘘を貰く 重  
 「ヨイトマケ」その絶唱に聞き惚れて 同  
 味噌汁の実に入れる初なす 穂  
 切り通し抜けて涼しき月と風 女  
 外環状を走るワゴン車 重  
 鍛えぬくマラソン選手腿太く 花  
 くるり丸まる留守番の猫 重  
 花の宮欄宜の後行く嫁御寮 女  
 凧に描くは猛き若武者 重  
 ナオ畦塗りの腰を伸ばしてひと休み 穂  
 びつくりしたよこれは朽縄 女  
 昭一も大鵬も逝きわれ卒寿 同  
 ハモニカケース仕舞ふ引き出し 葵  
 転校生色浅黒くつづらな瞳 重  
 心をこめて贈るえりまき 穂

空港で再会果たしプロポーズ 重  
 ロゼのワインと夢に酔ひしれ 葵  
 音もなく開く水蓮美しく 同  
 古き長椅子並ぶ胡同<sup>胡同</sup> 女  
 張出窓餌台置けば小鳥来て 重  
 読書三昧朝方の月 穂  
 ナウ柿をもぐお礼は柿と青い空 女  
 御影堂にて回す大数珠 葵  
 慈悲深き後姿のありがたく 花  
 名刺サイズの写真モノクロ 穂  
 旅誘ふ花の便りの届く頃 葵  
 追ひつ追はれつふたつ蝶蝶 執筆

連衆 伊藤良重 繁原敏女 富田八穂  
 前田紅花  
 平成二十五年一月二十二日 首尾

ある日のころも連句会  
石川 葵

場所…豊田市青少年センター  
 日時…平成二十五年一月二十二日  
 午前十一時～午後五時  
 まず恒例になりました、あみだくじで座のメンバーを決めていきます。今回はAを引き当てた面々が私と同じテーブルに。  
 ではメンバーをご紹介しますしよう。

敏女さん…ころも連句会の大長老。御年九十？

歳お洒落な装い、恋句の妖艶さ、瑞々しい感性  
 そしてお元気なお声はみんなの憧れです。い  
 らっしゃらないと、何か忘れ物をしたような気  
 持ちがいたします。

良重さん…ころもの中堅どころ。現代社会への  
 鋭い切り口とビビッドな句は流石！ 新しい風  
 をころもに運んでくださいます。中国語、英語、  
 韓国語と語学も達者です。

八穂さん…孫六人に囲まれた、平和を愛する元  
 先生。「バアチャン頼む」の電話でスケッチに  
 いざいざと腕まくりをしてお出かけです。生活  
 に根差した、優しい目線の句が得意です。

紅花さん…和服美人。着付けの先生で、京都、  
 名古屋間を縦横無尽に飛び回っています。連句  
 を始めてまだ半年。何と今回初めて歌仙に挑戦  
 です。

葵…「寒椿」の座で捌をさせていただきました。  
 特技は猫語。連句と出会って十年。人との繋が  
 り、言葉の面白さ、奥深さを楽しんでいきます。  
 人に必要とされているうちが花との言葉を励み  
 に、社会と関わっていきたくと思っています。  
 うっかりの多さは極め付けです。

さてこの様な個性豊かな連衆との歌仙「寒  
 椿」、句の後ろに隠れている連衆のお顔をご想  
 像ください。おお！美人ばかりです。

南砺市いなみ全国連句大会2013  
浪化賞受賞作品

歌仙「寒稽古」

奥野美友紀 捌

寒稽古真一文字に結ぶ口 美友紀 尚子  
 冬芽はぐくむ裏山の樵  
 焼きたてのシナモンロール並ぶらん 紀  
 待合せて姉とマチネー 尚  
 月今宵尚も尽きせぬ話など 紀  
 連絡船の汽笛爽やか 尚  
 雁渡る北陸道を徒歩の旅 紀  
 先祖代々欄間彫る町 尚  
 不器用な理系男子も悪くない 紀  
 白馬の騎士と思はせるとき 尚  
 ワインセラームーツアルトの流れぬて 紀  
 巖滴りは月を抱きつつ 尚  
 畳紙ほどきて匂ふ薄衣 紀  
 カメラアングル四苦八苦され 尚  
 原発の深層見えぬ闇のまま 美  
 産土神に絶えずみあかし 尚  
 生徒らと交はずおはやう花の窓 紀  
 風やはらかく市の賑はふ 尚  
 ナオ魚島の立つて振る舞ふ茶碗酒 同  
 昔話に鬼はつきもの 紀  
 泣きむしが絵本開けば上機嫌 尚  
 出席○で囲み投函 尚  
 煮凝りのぷるんと別れ言ふ覚悟 尚  
 契約婚を考へる暮 紀

大屋根は鳩のサロンにカテドラル 尚  
 シニアグラスをかけて外して 紀  
 後ろから肩叩かれる人違ひ 尚  
 再開発で変はる駅前 紀  
 昇り旗しこ名染め抜き月円か 尚  
 お隣さんに貰ふ鈴虫 紀

ナウ父のため母のためとて菊供養

少しぬるめの湯加減もよく 紀

うたた寝の夢は覚えてゐないもの 尚

国境越える線路はるかに 紀

花爛漫若き王女のご懐妊 尚

プラスバンドの列に初虹 執筆

連衆 滝澤尚子

平成二十五年一月二十五日 起首

同年三月 九日 満尾 文音

連句寒稽古 附・井波のこと

奥野美友紀

再び連句をはじめたのは、瑞泉寺で拝聴した  
 田中善信氏の講演がきっかけだったし、初めて  
 捌きをしたのも瑞泉寺、初めて参加した連句の  
 全国大会は、四年前のこの大会だった。場にふ  
 さわしいいくつかの思い出が私にもある。

尚子さんとの初めての両吟、胸を借りる気持  
 で（と言ったら、尚子さんはきつと「や・め・て」  
 とお笑いになるだろう）お願いした。尚子さん  
 の付けは早い。もたもたしがちな私も、付けて  
 返す、その緊張感を失いたくなくて（それから、

締切も気になって、付けた。「寒稽古」という  
 巻だが、この作品はまさに私にとつての連句寒  
 稽古といつてよかった（いよいよ「やめて」と  
 言われそう）。

ひと月ほどかかって巻き上がるあいだに、春  
 になって、尚子さんと、尚子さんのダーリン  
 と、私と、娘がそれぞれひとつづつ年を重ねた。  
 娘は生後まもないころから、ときどき、連句の  
 会にお邪魔している。お菓子をたくさん食べべに  
 行っているのだが、同じ二月生まれである。そ  
 ういえば前回のいなみ大会のとき、この人はお  
 なかの中で参加していたのだった。

大会の後、尚子さんと鈴木千恵子さんと一緒  
 に、杉本聰さんのお宅に寄った。聰さんのお宅  
 は、瑞泉寺門前からからつやを営んでおられる。  
 からつや。または、せともんや。唐津・瀬戸物、  
 陶器店のことだ。私は子供の飯椀を二つ、それ  
 から懐かしい柄の蓋付きの飯椀を二つ買った。

大会をきつかけに、井波の連句教室にも顔を  
 出すようになった。連衆は決して多くないが、  
 俳句もたしなむ方が多い。言葉の吟味のしかた  
 や季語に対する感覚が、丁寧で繊細で、とても  
 勉強になる。

毎月第三金曜日の午前、出たり出られなかつ  
 たりしながら二回ほど通ったところで、お世話  
 役の大島朋子さんに、会費用の封筒を渡された。  
 私の名前が書いてある。「このほうが、気をつ  
 かわなくていいかと思って」と言われた。仲間  
 に入れて下さったよううれしかった。今度行  
 かれる日（たぶん、二月）が楽しみだ。

## 選ぶ人と選ばれる人 鈴木了齋

連句の募吟よりはるかに多くある俳句の募吟では、複数の選者が立っていても、応募者が選者を指定して投句し、各選者が個別に賞を選定する形が多い。大規模な募吟の応募は数万句にも及ぶので、そうするしかないし、当然、選者自身が選を求めて応募投句することはない。

その背景には、俳句がもともと、新聞や俳誌の投句欄に選を求めて応募するという形で、典型的な一対多のマス・コミュニケーション形態に乗ることによって急速に普及した文芸だという事情がある。この近代的コミュニケーション形態に乗りにくいことが、連句の衰頹の大きな要因の一つだった。だからこそ逆に、マス・コミュニケーションの限界が強く意識されはじめると時を同じくして、非近代的な「座の文芸」である連句の再評価が始まったのだろう。

俳句でも、募吟だけでは「選ぶ人」と「選ばれる人」が完全に分離してしまうので、句会という形で、選者や結社主宰なども一般の投句者と同じ条件で投句して互選や相互批評の俎上に乗る形が残る、これにより「座の文芸」としての俳諧の性格がかるうじて受け継がれている。

それでも俳句結社のなかには、そういう相互研鑽の場にも出ず、自己研鑽も怪しくなったにもかかわらず、過去の実績による優越的な立場を保つ集団を抱え、そのことを若い会員たちからひそかに揶揄されるような例も多々ある。

俳句とちがって連句作品を作るには手間も時間もかかるから、連句募吟の応募作品数は最大でも数百という単位にとどまる。相当数の選者による選が合算されることが多いし、選者と応募者が互いに顔見知りだったりすることも多い。これらの要因により、連句募吟は俳句募吟とは「選」の性格を異にする。マス・コミ的な選び、選ばれる関係とは言えず、俳句に例えるなら募吟よりもむしろ、互選句会に似ている。

俳句に「最高得点句に名句なし」という格言があるように、互選での好成績はあくまでも相対的な評価にすぎないけれど、それでも句会で作品を人目にさらし、反応を確認してみることが、自己研鑽の有益な手掛かりになる。

連句の座では、捌き手は作品の最終責任者として、他の連衆とは異なる権威を与えられているが、連句には俳句の句会のような、無条件で作品相互批判の俎上に乗る機会がない。そこには危険な側面も潜んでいる。募吟選者や連句協会役員など、指導的な位置に立ってしまうと、批判的な声は本人に届きにくくなる。

募吟への応募はそうした人にとつて、自らの作品を世に問う貴重な機会だ。イベントを支える応募料収入に寄与する意味もあるが、何より「選ぶだけの人」と「選ばれるだけの人」が分離固定化される、悪しき近代構造、非俳諧的な関係の形成を未然に防ぐために、それは必要ではないだろうか。選者も皆と同じように現役の「作者」でもあり続けたい。私は今後も、選者を拝命することがあればそうしたいと思う。

## 第二十八回国民文化祭山梨「連句の祭典」 山梨県教育委員会教育長賞受賞作品

### 半歌仙「咲くやうに」 鈴木了齋 捌

咲くやうに群れて夕日の都鳥 了齋

びくと引かるる寒釣の糸 恭子

早口の文学談義きりもなし 齋

袖はめくるかたくしあげるか 恭

旋盤の切屑月にきらきらと 齋

金木犀が曲がる目印 恭

ウ 代々に時代祭を受け継ぎて 齋

保安係は北国の人 恭

ポケットのキャッシュカードを握りしめ 齋

ギブソンギターコーナーは奥 同

政治家になつてあなたは変はつたね 恭

寝物語はいつも現在 齋

箱庭に恋のぬけがら照らす月 恭

灯明消さぬ夏行十句 齋

故里の母の電話の長きこと 恭

姪の入学甥の卒業 恭

あの丘もこの丘も花埋めつくし 恭

詩碑を包んで揺るるかげろふ 執筆

連衆 式田恭子

平成二十五年一月二十九日 起首

於 同年二月 七日 満尾

於 桃径庵 後半文音

# 温故知新

11…至り候ひにけりな

## ●俊頼、至り候ひにけりな

鴨長明『無名抄』建暦元年（一一二一）頃

## 第二十八段 俊頼の歌を傀儡歌ふこと

富家の入道殿に俊頼朝臣候ひける日、鏡の傀儡どもまゐりて歌つかうまつりけるに、神歌になりて、

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひ捨つれど  
離れざりけり

この歌を歌ひ出でたりければ、「俊頼、至り候ひにけりな」とてゐたりけるなむ、いみじかりける。

永縁僧正、このことを伝へ聞きて、羨みて、琵琶法師どもを語らひて、さまざま物取らせなどして、わが読みたる「いつも初音の心地こそすれ」といふ歌をここかしてにて歌はせければ、時の人、ありがたき数寄人となむいひける。

今の敦頼入道、またこれを羨ましくや思ひけむ、物も取らせずして、めくらどもに「歌へ、歌へ」と責め歌はせて、世の人に笑はれけり。

## ・現代語訳

富家の入道藤原忠実公に俊頼朝臣が伺候した日、鏡の宿の傀儡たちが参上して歌を歌ってさしあげた時に、神歌になって、

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひ捨つれど  
離れざりけり

（世の中はこの憂くつらいわが身に添っている影なのだろうか。捨てようと思っても離れられ

ないよ）

（俊頼作の）この歌を歌ったので、「この俊頼も人の域に至ったのですな」と、感慨ぶかげに殿のおそばに侍っていたのはすばらしいことであった。

永縁僧正がこのことを聞き伝えて羨ましく思つて、琵琶法師たちを手なづけて、いろいろな物を与えなどして、自身が詠んだ「聞くたびにめづらければ時鳥」いつも初音の心地こそすれ」（時鳥の声は聞くたびに新鮮ですばらしいので、いつ聞いても初音のような気がする）という歌をあちこちで歌わせたので、その当時の人々は、僧正のことを滅多にいない数寄人だと言った。

今の敦頼入道因は、またこの僧正のことを羨ましく思つたのだろうか、物を与えもしないで、盲僧たちに自分の歌を「歌え、歌え」と無理に歌わせて、世間の人に笑われたとか。

（主として角川ソフィア文庫『無名抄』久保田淳訳による。原文テキストも同書による）

解題●源俊頼は、平安時代後期の歌の名手。歌論書の草分けのひとつ『俊頼髓脳』の著者でもある。少し後の世代の俊成、定家なども俊頼についていろいろと論じており、また歌への執心を示すエピソードの多い個性的な人で、鴨長明の歌論書『無名抄』にもたびたび登場する。これはそのひとつ。

『万葉集』には、辺境の無名の庶民による、おそらくは民謡に近い「東歌」なども収録されているが、『古今和歌集』以後の勅撰集の収録歌の作者は、ほぼ貴族の男女と、貴族出身の僧侶に限られる。しかし平安後期に至って、摂関政治の衰頹、院政や、武家の勃興など、社会も流動化し、それと並行して、もともとは白拍子、遊女など地下の芸能民のものであった今様歌が貴族の間で流行するなど、文化面で

もさまざまな流動化が起こった。武家も歌を詠み、また貴族、地下を通じて連歌が流行し、庶民の間で行われた笠置連歌に、貴族がお忍びで牛車を立てて加わるといったことも行われるようになった。

『無名抄』で伝えられるこの傀儡神歌のエピソードからも、そのような流動的な時代の雰囲気活き活きと伝わってくる。

傀儡は当時の芸能民のひとつで、名の由来であるあやつり人形を使った芸の他にも、さまざまな芸能を演じていた。神歌というのも傀儡の持つ歌唱芸のひとつで、もとはその名の通り神前に奉納する神祇歌だったが、後にはその他の一般的内容のものも含む名称になった。二句と四句の形式があり、二句形式は文字の上では和歌と同じ形だ。

俊頼が関白太政大臣藤原忠実の邸に伺候していたとき、近江の鏡山から来た傀儡の集団が入ってきて、二句神歌を披露した。芸能民は主としてこのような芸に対する報酬で生活を立てている。その歌は俊頼自身が詠んだ歌だった。そこで俊頼が「これは自分もついに歌の道を極めたということだな」と感慨にふけた、というエピソードだ。

傀儡たちはそれが誰の作とも知らず、まして目の前にいる俊頼の歌とは夢にも思わなかっただろう。作者が誰であれ、たまたま耳にしたその歌の、憂き世、憂き身を嘆く実感の表現に共感して、それを自分たちの芸に採り入れたのだ。たとえ自分たちとかけ離れた暮らしをしている貴族の歌であっても。

俊頼もまた、自分の歌が、そういう実生活の違いや階層の垣根を越えて、人の心に届いたことに感銘を受けた。そしてそのことを、自分の歌がある境地に「至った」ことを示す指標として受け止めたことが興味深い。

それに続くエピソードからは、こうした出来事を

名歌の指標ととらえることに、俊頼以外の歌人も共感したことがわかる。それに基づいて、やや筋違いの、一種の「プロモーション」のような発想、活動が生まれた話も、妙な現実味があつて面白い。

昔も今も、プロモーション活動によって中ヒットくらいまでは作り出せるが、そうした「人為」では大ヒットは作り出せない。大ヒットのためにはミュージック和歌三神が降りて来てくれることが必須だ。ましてや道因法師のようにプロモーション費をケチつたのでは小ヒットさえおぼつかないだろう。

昔から日本では、専門家よりも庶民の審美眼が優れていることが多々ある。そして庶民自身もなかなかそのことに気付かない。町人の慰みものとみなされていた浮世絵は、他の美術品の包み紙として外国に輸出され、そこで「発見」されて狩野派や琳派よりはるかに大きいインパクトを世界の美術に与えた。これがよい例だ。

現代の流行歌、歌謡曲でも、名作とされるものの歌詞には、下手な現代詩よりはるかに詩歌として優れていると思えるような「ミュージックが降りた」一言を含むものがある。「通俗」なものの、創作として格が低いものという思い込みでそれを見逃さないようにしたい。ポップ・ディランがノーベル文学賞候補として取り沙汰されている例もある。

そうした「通俗」な流行歌に、私たちの作る俳諧のたとえ一節でも採り込まれるような時は来るだろうか。来ると信じたい。そういう時こそ、本当の俳諧復興が成る日、私たちも「至り候ひにけりな」と言える日なのではないだろうか。

『無名抄』には、他にも、現代の詩歌にも通じるような具体的、現実的で興味深い記述が多い。紹介した角川ソフィア文庫版の訳文は読みやすく、訳文だけを読み物として通読することもできる。(斎)

### 事務局だより

●平成二十五年芭蕉忌正式俳諧・明雅忌興行が開催されました(前号既報)

十月十六日(水曜日)、江東区芭蕉記念館にて、平成二十五年芭蕉忌正式俳諧・明雅忌源心が興行されました。当日の源心作品と正式俳諧配役、正式俳諧二十韻は今号P22～6に掲載しています。

●第二十八回やまなし国民文化祭芸芸祭「連句の祭典」が開催されました

昨年十月二十七日(日曜日)山梨「ぶどうの丘」にて、募吟各賞授賞式、続いて参加者は百七十人による連句実作会が開催されました。今回は山梨県連句協会による提案事業(文化庁国民文化祭事業)としての自主運営による開催でした。

#### ●今後の予定

・平成二十六年初懐紙(第百二十八回例会)  
一月十九日(日曜日)  
十二時～十七時(受付十一時より)  
於 ホテルフロラシオン青山



・平成二十六年藤祭正式俳諧(第百二十九回例会)  
平成二十六年四月二十五日頃 於 亀戸天神社

・同人会総会  
平成二十六年六月十五日(日曜日)  
於 新宿ワシントンホテル新館

●猫養基金にご協力ありがとうございます  
・山寺たつみ殿 平成二十五年十二月 五千円

・天の川連句会東京支部

平成二十五年十二月 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

#### ●新住所

・山田美代子 東京都文京区

#### ●受賞(前号既報)

・南砺市いなみ全国連句大会2013

浪化賞 石川葵 捌 歌仙「寒椿」の巻

浪化賞 奥野美友紀 捌 歌仙「寒稽古」の巻

・第二十八回山梨国民文化祭芸芸祭「連句の祭典」

山梨県教育委員会教育長賞

鈴木了斎 捌 半歌仙「咲くやうに」

の巻

上記三作品は今号のP8～10に掲載しています。

#### ●各種募吟にふるつてご応募ください

今年も「第二十九回国民文化祭あきた二〇一四」をはじめ、各種の募吟イベントが開催されます。ふるつてご応募ください。

季刊 『猫養通信』第九十四号

平成二十六年一月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社